觀測結果ニ比較してみたくてたまらなくなりました．幸にも當時發行されてゐた雜誌——この言葉は勿論適當でないかもしれません——Monatliche Korrespondenz (Zach といふ人が發行してゐました) 及び天文年報に氏が欲求してきた觀測結果が出してありました．そこで氏は Bohnenberger の本にしたがつて，これらの觀測のおこなはれた地點ニ氏が觀測した地點——Bremen——ニの間の時刻の相違をこの兩觀測の結果をしらべて計算して決めなければなりませんでした．その結果たつた一二秒あやしいといふ程度にまで精密に決定されました．これが氏の實地天文學上に於いての最初の成功でありました．このときの氏のよろこびは非常なものでありました．氏はこのときのよろこびについて自ら次の樣に書いてゐます．卽ち“この成功が私にもたらしたところのよろこびを理解しようとする人は青年の熱情をもたなければなりません云々.” (つゞく)

星

大阪　岡田春潮

ものみな眠る眞夜なか　ただ獨り窓を開いて
　大空に耀やく星くずの　沈默の歌を聞く

深く澄める闇黑の空に　きらめく千萬の星！
　過ぎ行く時の流れに　音も無く流れ行くか

地(つち)の上の總ての人は眠つて　私ひとり目覺めてゐる——
　神祕なる星の歌を　私ひとりが聞いてゐる！

私の心は故もなく　涯しなき大空に飛んで行く
　未だ見ぬ宇宙の涯から　星は私を導いてくれる

すべてのものの眠つてゐる地上に　私はひとりの知己をも求めない
　空の彼方の星くずよ　私は御前だけで滿足だ！

ここに私の存在がある　そして私は祝福されてある——

叡山上のミラム教授夫妻

去る1927年十二月31日．米國の天文學者ミラム教授夫妻を迎へて比叡山に案内したときの寫眞．向つて左よりミラム教授，ミラム夫人，新城教授．撮影者は山本．(「天界」第83號第83頁參照) 場所はケーブルカー停車場の南側，目の前には御正月の準備で，しめ飾りがある．ミラム氏が右手に持つてゐるのは新城教授から贈られた論文集．